

令和 4 年 11 月 29 日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 202080252

氏 名 森田 和樹

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先: 都市名 ソウル (国名 大韓民国)
2. 研究課題名 (和文) : 1950～60年代韓国における軍隊忌避に関する社会史的研究
3. 派遣期間: 令和 3 年 11 月 5 日 ～ 令和 4 年 11 月 1 日 (361 日間)
4. 派遣先機関名・部局名: 聖公会大学東アジア研究所冷戦平和研究センター

5. 派遣先機関で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本研究の目的は、1950年代から1960年代を対象に大韓民国における脱走兵と徴兵忌避の歴史を社会史的な観点から描き出すことにある。このような研究を遂行するにあたり、本研究は各種新聞・雑誌史料、国会関係史料、裁判史料、文学作品の系統的な把握、オーラルヒストリーの手法にもとづくインタビュー調査などを予定していた。結果的にいえば、コロナの影響が大きかったにもかかわらず、調査自体は予想以上に大きく進展した。たとえば、陸軍の憲兵資料を中心に軍内資料にもアクセスできたし、裁判史料も広範に集めることができた。これらの資料は、短期で滞在するだけでは到底得られるものではなく、少なくとも数ヶ月の時間を費やした資料の事前調査のうえに得られたものであった。

一方、大きく進展が見られなかったのが、インタビュー調査である。まず、脱走兵や兵役忌避という韓国社会においては語りにくい経験であるものを対象にしているのに加え、そもそも研究対象者が集まっている団体があるわけでもないがゆえに、インタビュー対象者を見つけることが極めて困難であった。この点は、より地道に今後も調査の機会を作っていく必要があるであろう。

総じて、研究はかなり進展したといえる。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

プログラムを通じた研究遂行によって、すでにふたつの研究成果をまとめることができた。ひとつは韓国での研究会での発表であり、もうひとつは韓国語での論文発表である。

より具体的にいえば、2022年3月、報告者の所属先の研究所である聖公会大学東アジア研究所にて1950年代に日本へ逃れた兵役忌避者および脱走兵に関する発表を行い、参加者からさまざまなコ

メントをもらうことができた。発表のもとになったのは、2021年に日本語で発表した論文だが、この発表を通して自身の既存の研究成果を韓国の研究者に伝えることができた。

もうひとつは、1950年代の韓国軍脱走兵に関する論文である。「1950年代韓国軍脱走兵の動態とその様相」と題したこの論文は、2022年11月30日付発行のソウル所在の歴史問題研空所の学会誌『歴史問題研究』に掲載されることになった。題名の通り、本稿は1950年代の韓国軍脱走兵の動態とその様相について論じたが、この論文の基盤となった資料はほとんどが今回の滞在で得られたものであった。

さて、今後の研究計画の方向性について記述しておく、前述の一連の作業によって1950年代～60年代にいたるまで文書史料はすでに広範に収集することができた。したがってその具体的な分析と1960年代の脱走兵および兵役忌避の趨勢をまとめることが重要な課題である。とりわけ、この分野に関しては、大韓民国の現代史研究において進展がみられるため、私もまた、引き続き、韓国での論文投稿を通して現地の研究者と対話していきたいと考えている。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

すでに述べたことと重複するが、研究発表と論文の投稿および掲載を韓国社会において展開できたことは、本プログラムにおいて得られた非常に大きな収穫であった。これらの活動のおかげで新たな研究者のネットワークを構築することができた、とりわけ、私が滞在した都市ソウルは、全世界の朝鮮半島研究者が立ち寄る場所でもある。実際、滞在期間中、ヨーロッパや北米においてコリアン・スタディーズに従事している研究者とも交流を深めることができた。このような日韓にとどまらないグローバルな研究者の関係構築は、今後の研究遂行において非常に重要な機能を果たすと思われる。

一方、長期滞在による日常生活を送るなかで韓国での発表と論文作成の過程を通して現地の人びとの問題意識や問題設定のあり方、そしてその基盤となっている社会的文脈についての理解を深めることができた。これらは日常的に現地社会に身を置きながら社会に対する問題意識を共有し、日常的に互いにコミュニケーションをとることで可能になることであり、単に資料調査のために短期間滞在した程度ではその感覚をつかむことは容易ではない。このような現地社会の現時点での社会的感覚を一定程度把握できたこともまた、とてつもなく大きな成果であり、このプログラムの存在なくしては困難であったといえよう。